NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

NISHIMURA HARD-ROMAN SERIES

化石の荒野　西村寿行選集1

著　者　西村寿行　©1977
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店　東京都港区新橋四―一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二
カバー装幀　矢島高光　装画　横山明　本文挿画　金森達

78F15h

化石の荒野
昭和52年11月10日　初刷
昭和53年6月15日　8刷
著者　西村寿行
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋4―10　郵便番号105
電話(03)433・6231
本文印刷　㈱金羊社

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

1

化石の荒野

西村寿行

徳間書店

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erto

目次

第一章　流氷と少年 …… 7
第二章　幽霊水塊 …… 32
第三章　白骨の渓谷 …… 71
第四章　消えた爆撃機 …… 114
第五章　小樽と女 …… 145
第六章　老砂金掘りと蝮 …… 184
第七章　狂った守護神 …… 222
第八章　白い巨龍 …… 255

第一章　流氷と少年

1

二人連れの男が後ろから近づいてきていることは、仁科草介は知っていた。酔っぱらいのようだった。ろれつのあやしい口調で喋り合っていた。

東京の中野区、哲学堂に近い一画だった。七月二十八日――夜の九時過ぎで、人通りはなかった。住宅街だからその時間になればめったに人は通らない。

背後の二人の男は足を早めていた。酔っぱらい特有のつんのめるような足取りである。靴音でそれがわかった。仁科は歩調を崩さなかった。二人の男がご機嫌のあまり、何かを話しかけるか、からむかしようとしていることは、気配でわかっていた。

仁科は、アルコールに酔っぱらってもそうしたことをやったことはないが、やれば、なんだかすっきりしそうな感じのすることは、たまにあった。

「酔っぱらったってだ、なにも、法に触れてるわけじゃ、ねえや。そうだろうが」

すぐ後ろまで迫った足音の一人が、だみ声でいった。仲間にいったのか、仁科にいったのかはわからない。仁科は苦笑した。あまり酔い癖のよくない男らしい。

二人は乱れた足音をたてて仁科の両脇を擦り抜けようとした。その瞬間だった。仁科は左の脇腹にするどい痛みを感じた。

子供の頃、なんどか蜂に刺されたことがある。その痛さに似ていると思った。周辺には公園が多く、緑の多い地区だった。街灯に惹かれて出てきた昆虫が針をたてたのかと、その瞬間、ちらと思ったが、ちがっていた。

左右の腕を、同時に押えられていた。振り払おうと仁科は体をねじった。そうした体術には自信もあったし、また長身でもあった。だが、二人の男を振り放すことはできなかった。仁科の動きを音もなく、吸い込むように殺ぐすべを心得ていた。

仁科は体を沈めた。沈めた反動で肘を使い、さらに

足技を使うつもりだった。なんとかして振りほどかねばならない。左脇のホルスターには拳銃がある。奪われるようなはめにはなりたくはなかった。

体を沈めたまま、仁科は起き上がれなかった。意識がもうろうとなりかけていた。体が重い。

二人の男が自分を両脇から抱えて歩いたのは、知っていた。おびただしい光が網膜を埋めていた。自動車が近寄ったのだとわかった。しかし、そこまでだった。底しれない闇が仁科を呑み込んだ。

目が醒めた。

後頭部に宿酔のような重苦しいものがあった。胸がむかついて、吐き気がした。吐き気がして目が醒めたのだった。

部屋は暗い。何かわけのわからない夢を仁科はみていた。その夢の続きではあるまいかと思うほど、部屋の輪郭はさだかでなかった。しかし、やがて徐々に物は形をととのえてきた。窓らしい仄明るい光線の射すところがあった。その光線がすこしずつ壁や家具に吸い込まれて、それが形になった。

見知らぬ部屋だった。分厚い絨毯が敷いてあった。広い部屋だ。二十畳はあろうか、中央に応接セットが見える。人間を呑み込んでしまいそうな豪華で深ぶかと見える椅子に男が一人、掛けていた。

本能的に仁科はホルスターの拳銃に手をやった。拳銃はなくなっていた。よろめきがまだ残っていた。ソファにつかまって、どうにか、立った。たぶん、あのときに注射された薬のせいだ。体全体に揺曳感がある。

「なんとか、ご挨拶をしたらどうかね」

仁科は、椅子に体を埋めている男にいった。暗くて表情は見えない。

男は答えなかった。

「おい！」

よろめく足を踏みしめて男に近づいた。

ただでは済むまいと思う覚悟は、仁科にはできていた。なぜなら、相手は、警視庁捜査一課員である仁科の職業を知ってやったことにちがいないからだ。こんなもてなしかたをされるおぼえはまるでなかったが、襲った二人がその道のプロだということはわかっていた。どんな組織にせよ、プロが仕組んだ仕事に人違い

などの疎漏があろうとは思われない。もし、かりにあれば、ことは、さらにややこしくなる。人違いをして刑事を誘拐したとなれば、消すしかないことになる。

「答えたら、どうなのだ」

動かない男の胸ぐらを摑んだ。どうなるにしろ、ただで済ます気はなかった。

仁科は、男を離した。男が死んでいるのは硬直の感覚でわかった。

壁を調べてスイッチを入れた。中世風のシャンデリヤを思わせるきらめくガラス細工に灯が入った。男を、仁科は見た。男はパジャマ姿だった。胸がはだけている。その胸に拳銃の弾痕らしいのがあった。多量の出血がパジャマを染め、ソファに流れ落ちている。

テーブルに拳銃が載っていた。・38、コルトデティクティブスペシャル。ナンバーを見るまでもなく、自分のものだとわかった。側に毛布がまるめてある。拳銃を毛布でくるみ、音を消して撃ったようだった。

毛布を拡げてみた。弾痕を示す穴と、焼けこげができていた。

拳銃はそのままにして部屋を出た。持って出たところで、無意味だ。弾道の腔綫を調べれば持ち主はわかるし、その他にも、この演出を企んだ人物は、仁科が犯人である、逃れることのできない証拠を用意しているはずだ。指紋もあるだろうし、拳銃を隠すなら、死体も始末しなければならない。

高級マンションのようだった。廊下から、コの字型の建物の中庭にあるプールが見下ろせた。ライトに照らされた真っ青なプールに、三、四人のビキニ姿があった。

エレベーターで一階に下りた。

まだ、夜が始まったばかりだった。腕時計は七時を指している。ロビーには住人の出入りが多い。それらにまぎれて、仁科は外に出た。どこだか見当のつかない道路がマンションの前を走っていた。車が混んでいて、そのライトがひどく眩しかった。

左手で光の洪水をふせぐようにして、仁科は道路に出た。体の奥深くにある揺曳感はまだ残っていて、それが光の輪のきらめく重なりを、いやなものに思わせた。

一台の車が仁科の前でブレーキドラムのはげしい軋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

りをたてた。避けたつもりがよろけただけの結果に終わって、腰に軽い衝撃を受けた。足がもつれて、車道に膝をついた。
「ごめんなさい。お怪我は？」
運転席から降りてきた、ブルージーンズの長い下半身が見えた。若い女の声だった。
「なんともない。すこし熱があって、めまいがしただけだ。行ってくれ」
女に助け起こされた仁科は、すこし乱暴に女の腕を振り払った。眉が濃く、瞳の大きい女だった。周りに人がたかりはじめていた。
「病院にお連れします」
女は覗き込むようにした。
「そんな心配はいらないといっただろう」
「でも……」
女は不安そうに人だかりを見た。
「では、そのへんまで乗せていただこう」
人だかりを仁科はおそれた。群衆の中にはおせっかいやきがかならずいるものだ。一刻も早く、この場所から離れねばならない。
助手席に乗った。
「ほんとうに、だいじょうぶなんですか」
女は車を動かしながら訊いた。
「ああ」仁科はうなずいた。「ところで、あなたはどこに」
「新宿に出る予定ですけど、あなたの行くところへ」
「おれも、新宿で降ろしてくれればいい」
「病院に行かないのでしたら、わたしの免許証をひかえていただきます。もし、何かあったときのために。わたし、雪江千沙といいます」
「いい名前です。しかし、ぼくは名無しでね、名前のない人間にそんな面倒なことはしなくていい」
ぶっきらぼうに仁科はいった。
雪江千沙は黙って車を走らせた。
「妙なかたね、あなたって」
しばらくたって、雪江千沙が話しかけた。
「なぜだね」
「ぶっきらぼうだし、それに、どこか遠い国からやってきて、疲れはてたというふうに見えたわ。さっきは」
「……」

遠い国かと、仁科は肚でつぶやいた。やってきたのではなくて、これからそこに行かねばならないのだ。

新宿の高層ビル群の灯が見えてきた。ゆっくり点滅を繰り返す幾千ともしれないライトは、まるで原始時代の巨木に群がる螢を思わせた。

2

殺人事件の記事は、翌三十日の夕刊に出た。

平井剛一・五十八歳。
日本ウラニウム鉱社・社長。

殺された男の氏名と職業であった。

平井剛一は、千代田区麹町にあるマンションの一室で拳銃による射殺死体で発見された。死亡推定時刻は二十九日午後六時から七時。死体の側には凶器に使ったと思われる拳銃が転がっており、その拳銃が私服警官が携帯している、・38、コルトデティクティブスペシャルであるところから、警視庁は事件を重大視し、拳銃所持者を調べ中であるとあった。なお、平井剛一の殺されたことについて、近親者や友人は、その原因がわからないとコメントしてあった。

——調査中か。

仁科は、新聞を捨てた。調査などはものの数秒もあればコンピューターからはじき出される。捜査一課員である仁科草介のものだと知って、警察はあわてているのだ。真相を突きとめねばならない。発表を押えて、懸命に行方を捜しているのだ。

だが、仁科は行方を断った。そういつまでも隠しておおれないから、たぶん、明日には発表しよう。重要参考人か、あるいは容疑者として指名手配が出ることになる。

——逃げおおせるか？

その自信はなかった。警視庁は面子(メンツ)にかけて捜査網を敷くにちがいない。それがどんな峻烈なものか、仁科にはわかっていた。道を歩くときにも、夜眠るときにも、一刻の安心もできなくなる。切れかかった細いロープを渡るような危険な逃亡生活が続くのだ。

何者かに強引に殺人者に仕立てあげられたとわかっ

たとき、仁科は逃亡を決意した。自首は論外であった。

警察の捜査がどんなものかは、知りすぎていた。

仁科の供述を警察は信じようとする。体面を保つためにはそうするしかないのだ。だが、やがて疑いはじめる。どう調べても裏づけがとれないからだ。裏づけなどはあるはずはないのだ。どのような組織かは知らないが、プロが綿密に練り上げた犯行なのだ。

警察は、自身を救うために、仁科を犠牲にしようとする。トカゲの尾の自切だ。理由はどうとでもつく。自白を強要する。何十時間も眠らさないで訊問を続けるだろう。思考が混乱し、濁ってくる。眠りたい一心で、教えられた通りの自白をするはめになる。警察での自白は公判廷で覆せばよい。だれでも、そう思いはじめる。それがおとし穴になる。自白は検察官にも裁判官にも重大視される。もちろん、刑訴法はある。しかし、刑訴法を都合のいいように解釈することは、警察と検察のお家芸である。証拠がなければ、自白を得るためにあらゆるてを使う。たとえば何十時間も眠らせず、留置場では正座しか許さない。傷痕を残さないように拷問もする。弁護士には会わせない。弁護士が

抗議すると、面会許可証を検事からもらってこいと突っぱね、検事は許可証請求をぐずぐずのばして時間を稼ぐ。二、三日も引きのばすことがある。やっと許可証を持って駆けつけると、容疑者を別の署の留置場に移したから、手続きをやりなおせとくる。刑訴法は存在しないに等しい。

そうやって得た自白を唯一の根拠に、公判廷が開かれる。物的証拠がなく、その自白が自己に不利益な唯一の証拠である場合には有罪とされないと、刑訴法にはあるが、そんなことは通用しない判事が多い。あっさりと、刑を宣告される。

もちろん、中には正義派の警官や検事がいないわけではない。だが、いずれにしろ、仁科の犯した殺人が無罪になることはあるまい。それは仁科にはわかっていた。自首をすれば確実に殺人の刑を受けよう。

刑を受けるわけにはいかなかった。

報復——取るべき道はそれしかなかった。職を奪い、殺人犯の汚名を着せた組織がどこかに存在するのだ。冷酷無残な組織だった。なんの理由もなく、突然、一人の人間を逃亡者に仕立てあげたのだ。いや、理由は

ないわけではあるまい。
無作為に自分が選ばれたわけではあるまいと、仁科は思っていた。だれかに罪を被せるだけなら、刑事を選ぶわけはない。犯罪者に仕立てあげられても、弁護士も雇えず、ろくに抗弁もできない人間はいくらもいるのだ。逆に逮捕されかねない危険を冒して自分を襲ったには、それなりの理由がなければならない。
そして、何者ともわからない組織は、仁科を殺人者として警察に売る計画は持ってなかった。——襲われてからまる一昼夜、仁科は眠らされていた。売るつもりなら、仁科がまだマンションで眠っている間に警察に通報するとか、工作する時間はタップリあったのだ。組織はそれをしなかった。
それをしない理由は一つしかない。仁科を犯罪者に仕立てはするが、警察には売らずに逃亡者の道を選ばせる——組織は、仁科が逃亡することを読んでいたのだ。
たんに逃亡者に仕立てるだけでは、組織にはメリットはない。国家権力に追われて安住の地をなくした男——組織の狙いは、たぶん、そこにあるのだ。
仁科は、待っていた。
おそらく、あのマンションを出たときから見張られていたものと思う。その気配は感じられないが、いまも巧妙な尾行者の目が自分をとらえているにちがいない。仁科を闇の世界に見失っては、わざわざ逃亡者に仕立てあげた価値がないのだ。どこに行こうと、ピタリと照準をすえた目が狙っていることに、仁科は確信を持っていた。
——いずれは、姿をあらわす。
待つしかなかった。ただ、待つだけであった。どんな組織か、仁科には見当もつかない。その目的とするところはなおさら闇に包まれている。
接触者を待って、全貌をあばき、自身の潔白を証明する——だが、それだけではなかった。この理不尽な罠を設けた人物に、報復をはたさねばならない。
静かな憤りを秘めて、仁科は歩いた。
七月も終わりの、カッと照りつける陽射しが街路樹の濃い影を舗道に落としていた。
翌日の朝刊に詳細な記事が出た。
容疑者は警視庁捜査一課勤務の仁科草介・三十歳。

手配中――とある。

コメントがある。仁科の上司の捜査一課長は、犯人を仁科草介と断定したわけではないと説明していた。

足取り捜査では、仁科は七月二十八日午後八時三十分頃、同僚と中野駅で別れて江古田にある自宅に向かっていた。2DKのマンションに住んでいた。独身である。マンションの住人で帰宅した仁科の姿を見た者はなかった。途中で何者かに襲われ、拳銃を奪われた可能性がある。犯行発覚後も、仁科からはなんの連絡もなく殺害されたとみられるふしもある。それを裏づけるものとして、仁科と殺害された平井剛一の間には、現在までの捜査ではいかなる関係も見出されない。

仁科草介は有能な捜査員であった。出生は北海道網走支庁湧別。サロマ湖に近い、かつては小さな漁村だった。これまでに三度、総監賞を受けていた。協調性を無視しがちな、どことはない暗い面がないことはないが、捜査員としてはシャープな切れ味を持っていた。性格は寡黙の一語に尽きる、と。

〈暗くて、寡黙か……〉

仁科は、つぶやいた。いい得ていた。記事がかすんで、そのかすみのはてに一人の少年の姿が見えた。

少年はオホーツクの海辺に出て流氷を見ていた。はてしのない鉛色の海に流氷は押し寄せていた。風の音に混じって流氷の軋む音がきこえる。

少年は毎日のように海辺に立った。

ある日の日暮れ、一匹の狐が流氷に乗っているのを見た。鉛色の空、鉛色の流氷――その中にキタキツネの褐色の毛色が点景をなして荒涼とした画面を引き締めていた。年老いた孤独な漁師のように、そのキタキツネは動かなかった。

狐が流氷に乗ってオホーツクの海を渡ることがある――少年は祖父にそうきいたことがあった。目の前の狐が樺太からやってきたのか、それともこれからサハリンに渡ろうとしているのかは、わからなかった。ただ、どちらにしてもこの荒涼の海に乗り出した狐はいったい何を考えているのだろうかと、少年は思った。哀しいような気がした。生きることの厳しさの思念だったかもしれない。

やがて、夕闇が海から湧いて狐の姿を閉ざしてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto